

令和6年度 研究紀要 第243号

調査課題研究

特別支援教育に関わる
各種連携について

胆振教育研究所



特別支援教育の連携の重要性

胆振教育研究所 所長 佐藤 淳
(伊達市立東小学校 校長)

近年、特別支援教育の重要性はますます高まっており、障害のある児童生徒一人一人に最適な支援を提供するためには、教員が相互に連携し、協力して取り組むことが不可欠です。しかし、特別支援教育の充実を図るには、教員や関係機関との連携にさまざまな課題が存在します。特に、どのように連携を深め、意識の違いを乗り越えていくかが、支援の質を向上させる大きな鍵となっています。

学校内では、通常学級の教員が特別支援教育に関する研修を受けているものの、限られた知識や経験しかもっていない場合が多く、特別支援学級の教員や特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）との連携が不十分だと感じる 경우가少なくありません。そのため、支援が必要な子供たちに対して、どのように適切な支援をすればよいか、明確なビジョンをもてていない状況が生まれています。一方で、特別支援学級の教員は、支援が必要な児童一人一人に対して個別の支援計画を立て、きめ細かな指導を行っています。しかし、通常学級との連携では、交流学习時に事前打ち合わせが不十分だったり、情報共有がなされなかったりすることがあります。その両者の連携を担うのがコーディネーターです。コーディネーターが、支援方針や実践の調整を行っていますが、特別支援学級担任を兼務していたり、コーディネーターとしての経験が浅かったりすると、その役割が十分に機能しないことがあります。このため、連携が十分に進まない場合があり、支援の方針や方法に対する認識の違いが連携の障害となることもあります。

本研究所では、このような特別支援教育に関する連携の実態を調査するため、苫小牧市と室蘭市を除く胆振管内の小中学校にアンケート調査を実施しました。通常学級の教員、特別支援学級の教員、コーディネーターのそれぞれの立場から特別支援教育に対する認識や連携に対する意識にどのような違いがあるのかを分析し、その結果を本紀要にまとめました。

調査結果として、特別支援学級の教員と通常学級の教員の間で、支援の方法や連携に対する認識のギャップが明確に浮き彫りとなっています。また、中学校では特別支援教育に関わる研修があまり行われていないことも明らかになっています。この調査結果が、各学校の特別支援教育の改善に少しでも貢献できれば幸いです。教員が互いに学び合い、支援を充実させることで、より良い教育環境が作り上げられることを心より願っております。

最後に、本紀要作成にあたりアンケートにご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げ、発刊の挨拶とさせていただきます。

■ もくじ

○巻頭言	胆振教育研究所長 佐藤 淳
○調査の概要	1
○「特別支援教育に関わる各種連携について」アンケート調査	
A 回答者の経験年数など	2
B 全員対象の質問	3
C 特別支援学級担当者 および 特別支援教育コーディネーター対象の質問	20
D 特別支援教育コーディネーター対象の質問	28
○調査を通して見えてきたこと・現状と課題	34
○特別支援教育に関わる各種連携を効果的に進めるために	35
○参考文献	36
○令和6年度 所員一覧	36
○あとがき	37

■ 本調査の概要

■調査の趣旨及び目的

中教審「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の「新時代の特別支援教育の在り方」において、特別支援教育は、障害のある子供の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、子供一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援をするという基本的な考え方や、障害のある子供の学びの場の整備・連携強化、特別支援教育を担う教師の専門性向上、そして関係機関の連携強化による切れ目のない支援の充実といった4項目が示されています。今後、特別支援教育への理解を深め、校内外との連携を効果的に進めることがさらに求められています。

そこで、胆振教育研究所では特別支援教育に関わる胆振管内の状況や課題を明らかにし、特別支援教育に関わる連携の実態について調査を行い、各校で特別支援教育の充実のために、より効果的な連携につながるよう役立てていただきたいと考えました。

■調査内容と回答者

胆振管内（苫小牧市、室蘭市を除く）のすべての小・中学校にご協力いただき、9月に調査を実施いたしました。

小学校144名、中学校76名、計220名に回答していただきました。担当別の回答者数は通常学級担当131名、特別支援学級担当65名、特別支援教育コーディネーター24名となりました。

■回答方法について

調査はGoogle Formsを用いてオンラインで回答いただきました。記述式で回答いただいたものについては、一部編集して取りまとめて掲載しております。

「特別支援教育に関わる各種連携について」アンケート調査

A 【回答者の経験年数等】

1 教員としての合計勤務年数

通常学級担当平均	特別支援学級担当平均	コーディネーター平均
16.5	20.7	20.9

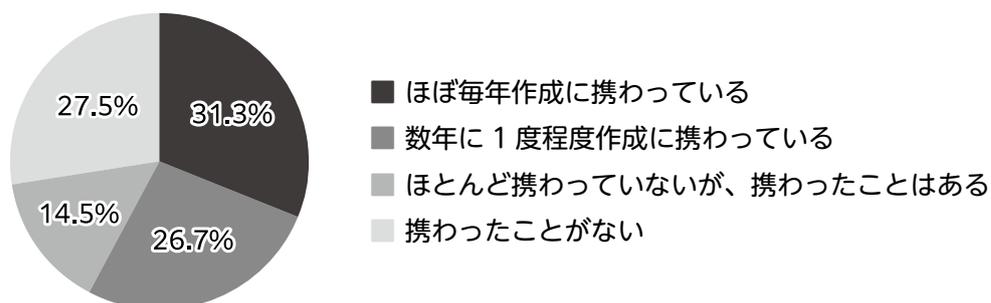
2 今までに特別支援学級を担当（担任・副担任）した年数

通常学級担当平均	特別支援学級担当平均	コーディネーター平均
1.7	6.9	7.5

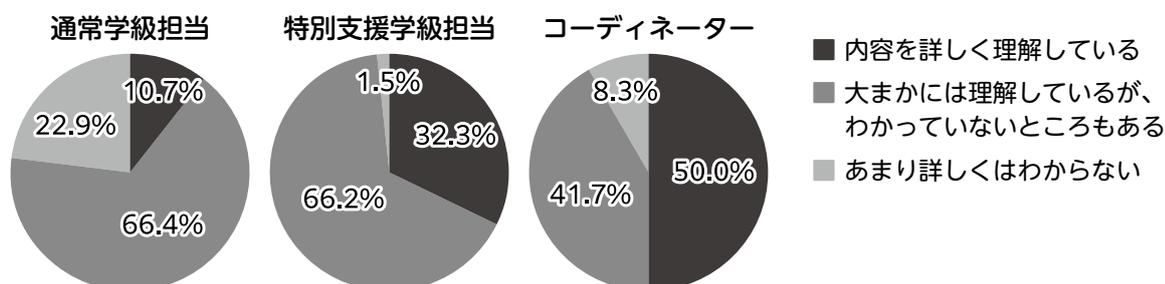
3 過去5年間の中で、校内研修以外での特別支援教育についての研修会に参加した回数

通常学級担当平均	特別支援学級担当平均	コーディネーター平均
2.0	3.6	6.8

4 個別の教育支援計画に携わった経験 ※通常学級担当の先生のみ回答



5 個別の教育支援計画への理解

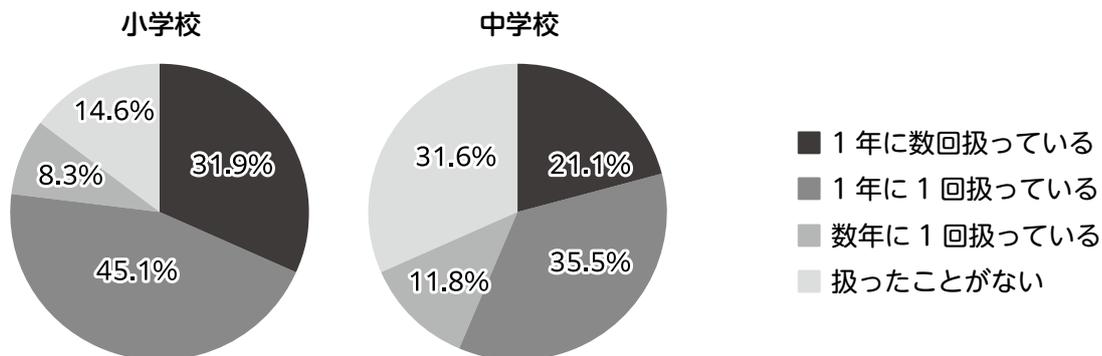


現在通常学級を担当している先生の特別支援学級担当経験年数は平均1.7年であるのに対し、特別支援学級担当教員は平均7年と、比較的長期間担当していることがわかります。

個別の教育支援計画については、通常学級担当は携わったことがない方が31.3%となり、詳しくは理解されていない割合が高くなっています。通常学級担当と比較すると特別支援学級担当・特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）は、理解度が高い傾向が見られます。

B 【全員対象の質問】

1 現在の勤務校では、校内研修で特別支援教育について扱っていますか。



2 1の質問で「扱っている」と解答した方へお聞きします。どのような研修をしているかお答えください。

①研修形式に関する回答（計55件）

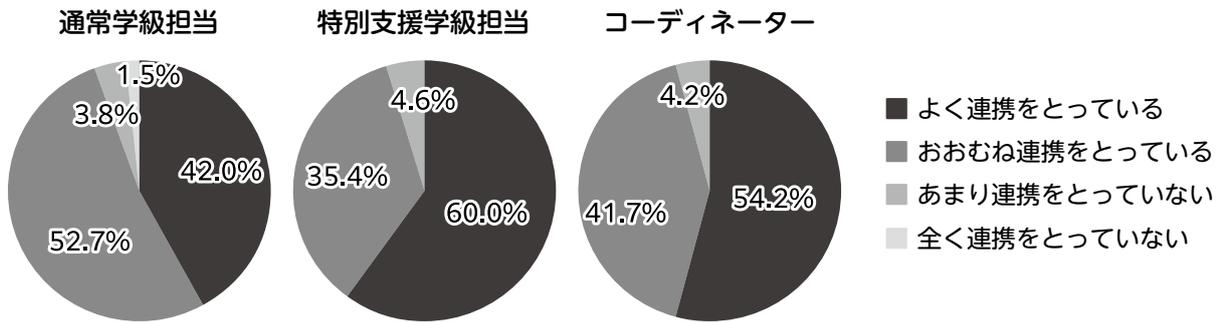
- ・外部講師による研修/講演：26件
※外部講師の例：高等養護、のぞみ園の方、SSW、SC、教育委員会アドバイザー、スーパーバイザー
- ・オンライン/動画研修：5件
- ・校内研修/授業研究：12件
- ・コーディネーターによる研修：8件
- ・紙面/書面による研修：4件

②研修内容に関する回答（計89件）

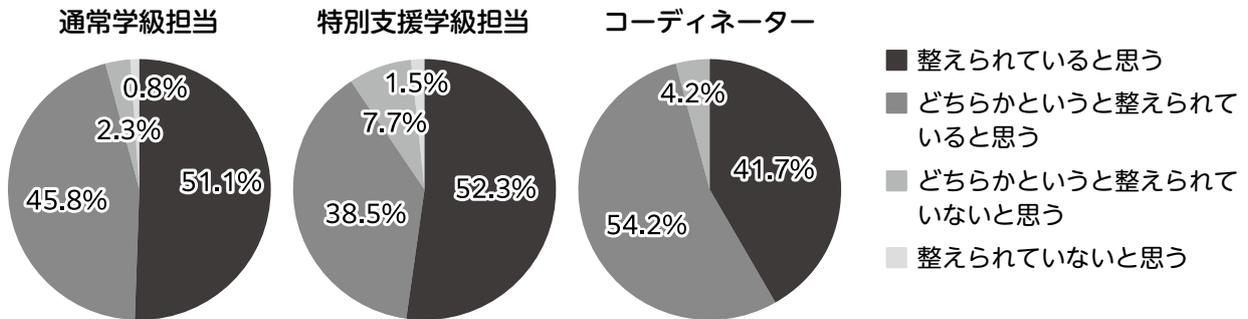
- ・特別支援教育の基礎知識/概要：15件
- ・児童生徒の理解/実態把握：14件
- ・個別の支援計画/指導計画：13件
- ・合理的配慮/インクルーシブ教育、ユニバーサルデザイン：12件
- ・具体的な指導方法/支援方法：18件
- ・WISCなどの検査/アセスメント関連：5件
- ・言語/ことばの教室関連：4件
- ・進路/就労支援：4件
- ・ケース研修/事例検討：4件

約7割の学校にて、特別支援教育に関わる研修が行われており、半数程度が外部講師を招いての研修や講演を実施しています。その他では、オンライン、授業研究、コーディネーターが講師を務めるケースなどが見られました。研修内容については、特別支援教育の基礎から、児童生徒の実態把握などの実践的な内容まで幅広く行われています。一方、「数年に1回扱っている」または「扱ったことがない」と回答した校種別の内訳は、小学校で22.9%、中学校で43.4%となり、中学校で研修される頻度が低いことがわかりました。

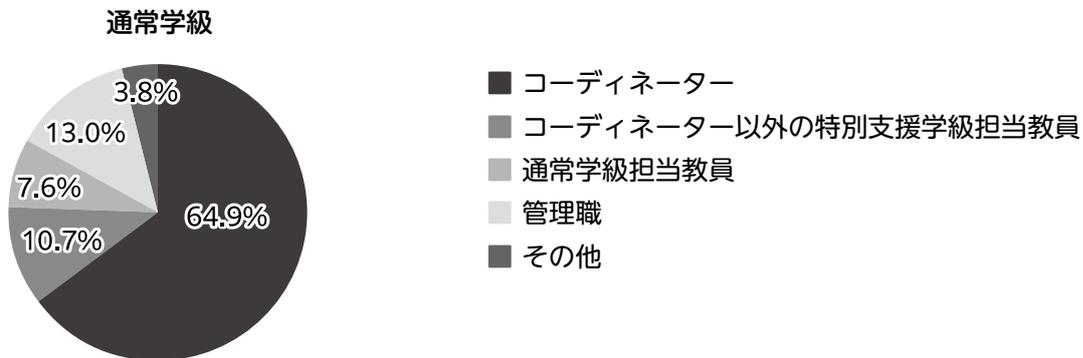
3. 特別な支援が必要と思われる児童生徒の対応において、校内の特別支援コーディネーターや特別支援学級担当者と連携をとっていますか。



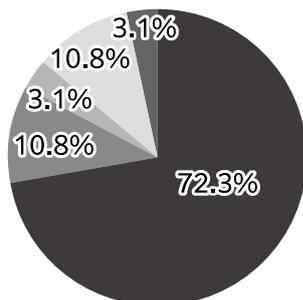
4. 特別な支援が必要と思われる児童生徒の対応において、相談しやすい校内体制が整えられていると思いますか。



5. 特別な支援が必要と思われる児童生徒の対応において、相談する際には主にどんな人に相談しますか。

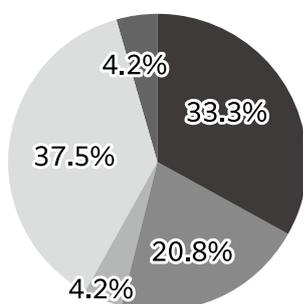


特別支援担当



- コーディネーター
- コーディネーター以外の特別支援学級担当教員
- 通常学級担当教員
- 管理職
- その他

コーディネーター



- コーディネーター
- コーディネーター以外の特別支援学級担当教員
- 通常学級担当教員
- 管理職
- その他

特別な支援が必要と思われる児童生徒に関わる校内の連携体制については、3者ともおおむね相談しやすい環境が整っており、連携をとれているという回答が多く見られました。また、通常学級担当と特別支援学級担当は似た傾向となっており、連携をとる際の主な相談相手は、7割程度がコーディネーター、1割程度が特別支援学級担当の先生となっています。コーディネーターが相談する際は、管理職やコーディネーター以外の特別支援学級担当の割合が高くなっています。コーディネーターが複数配置されている学校では、コーディネーター同士で連携をとっているケースが見られます。

6. 特別な支援が必要な児童生徒の対応において、自校内で連携をとる場合、どのように連携をとっていますか。

通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①定期的な情報共有（計53件）	①定期的な情報共有（計29件）	①定期的な情報共有（計11件）
<ul style="list-style-type: none"> ・「定期的に交流する機会をもつ」など : 34件 ・定期的な会議／交流会 : 8件 ・月1回の支援委員会／生徒指導交流 : 4件 ・週定例の終会／職員会議 : 7件 	<ul style="list-style-type: none"> ・「定期的に交流する機会をもつ」など : 16件 ・月1回の会議／委員会 : 4件 ・週1回の打ち合わせ : 3件 ・職員会議での交流 : 6件 	<ul style="list-style-type: none"> ・「定期的に交流する機会をもつ」など : 7件 ・月1回／学期1回の会議 : 2件 ・定期的な交流会 : 2件
②随時の情報共有（計24件）	②随時の情報共有（計14件）	②随時の情報共有（計6件）
<ul style="list-style-type: none"> ・職員室での日常的な会話／直接相談 : 12件 ・必要に応じた報告／相談 : 8件 ・放課後や空き時間での交流 : 4件 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的な情報交換／連絡 : 7件 ・その都度相談／確認 : 4件 ・放課後の相談／交流 : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員室での日常的なコミュニケーション : 2件 ・その都度の速やかな交流 : 1件 ・放課後の交流 : 2件 ・こまめな情報共有 : 1件
③組織的な対応（計15件）	③組織的な対応（計11件）	③組織的な対応（計7件）
<ul style="list-style-type: none"> ・校内支援委員会 : 6件 ・コーディネーターへ相談 : 3件 ・管理職を含めた情報共有 : 3件 ・全職員へ周知／共通理解 : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケース会議／支援委員会 : 4件 ・校内支援委員会 : 3件 ・学年部会／打ち合わせ : 2件 ・全職員への周知 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内支援委員会 : 3件 ・教育支援委員会 : 1件 ・生徒指導交流会 : 2件 ・支援委員会 : 1件
④その他の具体的な方法（計8件）	④特定の担当者との連携（計4件）	④特徴的な連携方法（計3件）
<ul style="list-style-type: none"> ・保健日誌での情報共有 : 1件 ・ケース会議 : 2件 ・実態交流会 : 2件 ・その他 : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターと連携 : 2件 ・特別支援学級主任と相談 : 1件 ・通級指導教室担当と連携 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・共有ドライブでのデータ共有 : 1件 ・コーディネーターからの声掛け : 1件 ・終会での周知 : 1件

自校内での連携方法については、3者とも半数程度が交流会などで定期的に連携をとる、2割程度が随時連携をとる、あとは支援委員会などを通して連携をとるという回答が多く見られました。連携の方法の中では、共有ドライブを活用して連携をとるという回答も見られました。

7. 特別な支援が必要と思われる児童生徒の対応において、接続先の学校（小→中、中→高など）と連携をとる場合、どのように連携をとっていますか。

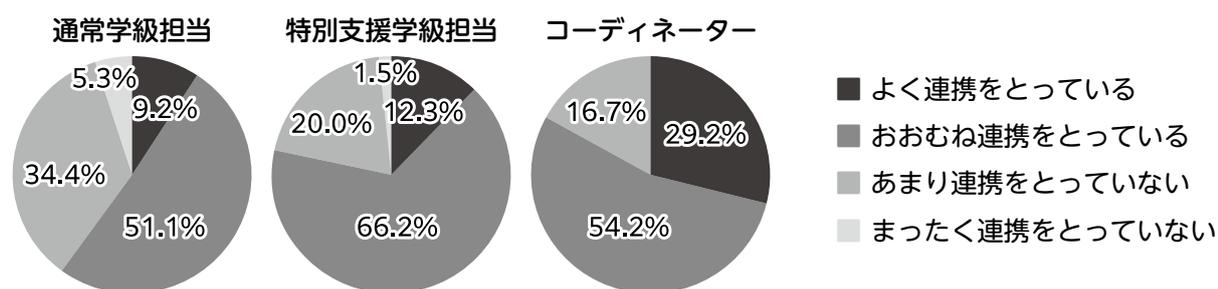
通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①引き継ぎの際に連携をとっている（計33件）	①引き継ぎの際に連携をとっている（計19件）	①担当者間の直接連携（計7件）
②担当者間の直接連携（計10件）	②定期的な連携・会議（計12件）	②定期的な連携活動（計7件）
<ul style="list-style-type: none"> ・担任間での連絡・面談：5件 ・管理職間の連携：2件 ・その他の教員間連携：3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中連携会議：4件 ・市教研、部会での交流：5件 ・交流学习／授業：2件 ・その他の会議：1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な授業・実態交流：3件 ・小中連携会議：2件 ・特別支援学級説明会：1件 ・町内支援委員会での連携：1件
③コーディネーターを通じた連携（計8件）	③コーディネーターを通じた連携（計6件）	③コーディネーターや管理職を通じた連携（計4件）
④定期的な連携・会議（計7件）	④複合的な連携方法（計5件）	④特徴的な連携方法（計3件）
<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な交流機会の設定：3件 ・研修会での連携：2件 ・教育支援委員会など：1件 ・小中合同研修会：1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・電話、メール、面談の組み合わせ：3件 ・会議と引き継ぎの組み合わせ：2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業参観と保護者同席の引き継ぎの組み合わせ：1件 ・学校見学：1件 ・必要な児童への個別対応：1件
⑤書類・計画に基づく連携（計6件）	⑤担当者間の直接連携（計4件）	⑤わからない（計1件）
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育支援計画の活用：4件 ・引き継ぎ資料の活用：1件 ・校務支援システムの活用：1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任を通じた連携：2件 ・管理職を通じた連携：1件 ・主幹教諭を通じた連携：1件 	
⑥複合的な連携方法（計6件）	⑥その他の連携方法（計3件）	
<ul style="list-style-type: none"> ・電話・訪問・面談の組み合わせ：3件 ・その他の複数連携方法の併用：3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育学校としての組織的連携：1件 ・必要に応じた連絡：1件 ・支援学級主任への相談：1件 	
⑦わからない等（計7件）	⑦わからない等（計2件）	

接続先の学校（小→中、中→高など）との連携については、3者とも引き継ぎの際に連携をとるという回答が最多となりました。他の回答では、通常学級担当はコーディネーターや特別支援学級担当などの担当者を通して連携をとるという回答が多く見られました。特別支援学級担当は、コーディネーターを通して連携をとるほか、自ら直接連携をとるケースも見られました。コーディネーターは、定期的に連携する場を設定し、交流を進めていることがわかります。

8. 特別な支援が必要と思われる児童生徒の対応において、同じ校種の他校と連携をとる場合、どのように連携をとっていますか。

通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①会議・研修を通しての連携 (計8件)	①会議・研修を通しての連携 (計17件)	①定例会議・研究会での連携 (計7件)
<ul style="list-style-type: none"> ・市教研での情報共有 : 3件 ・教育支援委員会 : 2件 ・交流会 : 2件 ・その他の会議 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究会(市教研/町教研) : 7件 ・特別支援教育振興協議会関連 : 5件 ・合同学習/ケース会議 : 3件 ・その他会議 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の時などに連携をとっている : 1件 ・市内教育研究会 : 2件 ・町の教育研究所の特別支援部会を通して : 1件 ・町の特別支援部会等の機会を利用 : 1件 ・特別支援部会 : 1件 ・コーディネーター同士の会議での交流 : 1件
②その他の連携方法(計6件)		
<ul style="list-style-type: none"> ・クロームブックを使用した交流 : 1件 ・学校訪問 : 1件 ・特性別グループでの事例交流 : 1件 ・校務支援システムの活用 : 1件 ・必要に応じた連絡 : 2件 		
③連絡手段について(計10件)	②連絡手段について(計8件)	②連絡手段について(計6件)
<ul style="list-style-type: none"> ・対面での連携 : 4件 ・電話やメールでの連携 : 6件 	<ul style="list-style-type: none"> ・C4th/クラスルーム : 3件 ・電話 : 3件 ・Meet/メール : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・zoomなどでの交流 : 1件 ・オンラインで連携 : 1件 ・c4thなどの活用 : 1件 ・電話 : 2件 ・メール : 1件
④コーディネーターを通じた連携(計14件)	③担当者を通じて連携(計7件)	③対面での連携(計3件)
⑤管理職を通じた連携(計5件)	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーター経由 : 3件 ・管理職経由 : 2件 ・主任/主幹教諭経由 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・対面での連携 : 2件 ・パートナーティーチャーの来校 : 1件
	④訪問などで連携(計5件)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校訪問/授業参観 : 3件 ・訪問交流 : 2件 	
⑥わからない・不明(計15件)	⑤未実施/不明(計6件)	
⑦連携をとっていない(計13件)	⑥連携をとっていない(計3件)	④連携をとっていない(計7件)

9. 外部の特別支援教育関係の機関と連携をとっていますか。



同じ校種の他校との連携については、特別支援学級担当とコーディネーターは、市町の研究会などで定期的に顔を合わせる機会があり、その際に行っているという回答が多く見られました。通常学級担当については、コーディネーターを通して連携するという回答が多く見られました。また、連携をとっていないという回答は通常学級担当で71件中13件、特別支援学級担当で46件中3件、コーディネーターで16件中7件と、同じ校種の他校との連携をしていないケースも散見されました。

一方、外部の機関とは必要に応じて連携をとっており、主にコーディネーターが窓口となっている様子が見られます。

10. 特別支援教育について研修したいことはどんなことですか。

通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①具体的な支援・指導方法 (計32件) ・通常学級での支援方法：12件 ・個に応じた指導：8件 ・具体的な実践事例：5件 ・交流授業での支援：2件 ・暴れる子への対応：1件 ・不登校対応：1件 ・ICT活用：1件 ・ユニバーサルデザイン：1件 ・学習に向かえない子への支援：1件	①具体的な指導・支援方法 (計15件) ・自立活動の指導計画と実践：3件 ・教科指導の工夫：3件 ・ICTの効果的な活用：2件 ・学力不振児童への支援：2件 ・行動療法の活用：1件 ・主体的・対話的で深い学びの実現：2件 ・教室環境の整備とユニバーサルデザイン：2件	①検査・アセスメント関連 (計6件) ・知能検査の結果の見方と活用：2件 ・知能検査・アセスメント全般：2件 ・発達検査の見方：1件 ・学習定着の要因分析方法：1件
②障害特性の理解 (計12件) ・発達障害 (LD、ADHD等)：3件 ・障害種別の特性理解：3件 ・特性のアセスメント：2件 ・グレーゾーンの理解：1件 ・愛着障害：1件 ・神経発達症、知的発達症：1件 ・医療的ケア：1件	②アセスメントと実態把握 (計10件) ・WISC-Rなどの心理検査の解釈方法：3件 ・発達検査・アセスメントの実施と分析：3件 ・児童の実態見取りの方法：2件 ・検査結果の教育実践への活用：2件	②具体的な指導方法 (計5件) ・LD児への具体的指導：1件 ・個別最適な指導：1件 ・読字症などへの具体的指導：1件 ・読み書きが苦手な児童への支援：1件 ・日常の実践交流：1件
③計画・制度関連 (計11件) ・個別の教育支援計画・指導計画：4件 ・合理的配慮：3件 ・インクルーシブ教育：2件 ・教育課程の作成：1件 ・自立活動：1件	③連携体制の構築 (計9件) ・保護者との効果的な連携方法：3件 ・医療機関・療育施設との連携：3件 ・幼小連携 (5歳児相談含む)：1件 ・外部専門機関との連携の進め方：1件 ・校内の教職員間の連携：1件	③進路・連携関連 (計4件) ・小中高の進路指導と連携：1件 ・中学校進学・高校受験時の配慮：1件 ・小中連携と障害種別の指導：1件 ・保護者や専門機関との連携：1件
④連携関係 (計8件) ・専門機関との連携：3件 ・医療機関との連携：1件 ・支援体制：1件 ・保護者対応：2件 ・支援学級と通常学級の連携：1件	④特別な配慮を要する児童生徒への対応 (計6件) ・ASD (自閉症スペクトラム障害) の理解と支援：2件 ・LD (学習障害) への対応：1件 ・愛着障害の理解と支援：1件 ・情緒障害のある生徒への個別対応：1件 ・多動・衝動的な児童への対応：1件	④支援計画・制度関連 (計4件) ・合理的配慮・個別支援計画の作成：1件 ・最適な学びの場の選択：1件 ・適切な就学・変更：1件 ・通級指導：1件

⑤進路・長期支援（計4件）	⑤進路指導・キャリア教育（計6件）	⑤運営・体制関連（計2件）
<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導 : 2件 ・長期的な対応 : 1件 ・長期的な関わり : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの場の決定プロセス : 2件 ・就学支援の実際 : 2件 ・高等部進学に向けた支援 : 1件 ・就労支援の方法 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターの仕事 : 1件 ・特支担当の時間的余裕の課題 : 1件
⑥検査・評価（計2件）	⑥学校運営・体制整備（計5件）	
<ul style="list-style-type: none"> ・発達検査 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムマネジメント : 1件 ・合理的配慮の提供 : 1件 ・通級による指導の運営 : 1件 ・通常学級における特別支援教育の展開 : 2件 	
⑦その他（計3件）	⑦書類作成・法的対応（計3件）	
<ul style="list-style-type: none"> ・なし : 2件 ・特別支援の免許取得 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・公的書類の作成方法 : 1件 ・就学支援に関する書類 : 1件 ・少年法の理解と対応 : 1件 	

特別支援教育について研修したい内容は、それぞれの担当に応じて異なる傾向が見られます。

通常学級担当は学級の中でどのように特別な支援が必要な児童生徒に対応すべきか、という内容を研修したい先生が4割ほどと最も多く、障害特性や指導計画についての研修したいという回答が続きました。

特別支援学級担当とコーディネーターは、検査やアセスメント、具体的な指導方法といった、より実践的な内容を研修したいという回答が多く見られ、それぞれの役割での求める研修の違いが浮き彫りになりました。

11. 日常の学級指導の中で、特別支援について聞きたいことや学びたいことはどんなことですか。

通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①具体的な支援方法・対応 (計20件)	①指導方法・支援方法 (計16件)	①具体的な指導・支援方法 (計8件)
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の心情理解と声かけ : 3件 ・言葉がけ・接し方 : 3件 ・具体的な支援方法 : 3件 ・暴れる子の対応 : 1件 ・忘れ物・宿題未提出への対応 : 1件 ・学習不参加児童への対応 : 2件 ・視覚的・聴覚的な指導方法 : 2件 ・困り感に合わせた指導 : 3件 ・支援の境界・範囲 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的な指導法 : 3件 ・個の実態に応じた指導法の改善、工夫 : 2件 ・声のかけ方など : 2件 ・主体的に学習に取り組ませる方法 : 2件 ・わがままと特性による見分け方 : 1件 ・学習意欲を高める工夫 : 1件 ・個別の具体的な支援方法 : 2件 ・個別最適な指導 : 2件 ・日々の対応 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・書字が困難な児童への支援・具体的指導法 : 3件 ・自閉症スペクトラム、ADHD、愛着障害の複合的な課題への対応 : 2件 ・不登校傾向の生徒への対応 : 1件 ・適切な言葉のかけ方 : 1件 ・子どもの困り感への対策 : 1件
②通常学級での支援 (計13件)	②授業・カリキュラム関連 (計8件)	②教材・環境整備関連 (計4件)
<ul style="list-style-type: none"> ・通常学級での対応方法 : 3件 ・グレーゾーンの生徒への支援 : 3件 ・集団の中での支援 : 3件 ・通常学級における困り感低減 : 2件 ・支援員配置の問題 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムマネジメント : 1件 ・自由進度学習・複式授業 : 1件 ・生活単元学習の事例 : 1件 ・授業のアイデア : 2件 ・他校のカリキュラム : 1件 ・自立活動のノウハウ : 1件 ・通常学級での特別支援学級担任の役割 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に適した教科書や教材の選び方 : 1件 ・個に応じた学習指導の仕方 : 3件
③特性理解と個別支援(計8件)	③具体的な対応事例 (計7件)	③連携・交流関連 (計3件)
<ul style="list-style-type: none"> ・障害特性の理解と関わり方 : 2件 ・自閉症スペクトラムへの対応 : 1件 ・学習障害への対応 : 2件 ・個に応じた指導 : 2件 ・特性に合わせた授業方法 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・事例研修 (失敗事例含む) : 1件 ・教室を飛び出す児童への対応 : 1件 ・生徒のクールダウンについて : 1件 ・合理的配慮の実践例 : 1件 ・通常学級でのトラブル対応 : 2件 ・特別支援の生徒の犯罪事例 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流学習のあり方 : 1件 ・他との連携の具体的な実践事例 : 1件 ・児童間の関係構築 : 1件

④授業設計・環境整備（計7件）	④保護者・関係機関連携（計4件）	④検査・実践事例（計2件）
<ul style="list-style-type: none"> ・授業のユニバーサルデザイン : 3件 ・ICTを活用した学習 : 1件 ・授業の作り方・環境作り : 2件 ・複式学級での指導 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者対応 : 1件 ・他機関との連携 : 1件 ・保護者との関わり方 : 1件 ・教職員全体での理解を深める方法 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・各種検査結果の生かし方 : 1件 ・実践例を多く知りたい : 1件
⑤インクルーシブ教育・合理的配慮（計6件）	⑤進路・就労支援（計4件）	⑤制度・体制関連（計2件）
<ul style="list-style-type: none"> ・インクルーシブ教育 : 2件 ・合理的配慮 : 3件 ・ユニバーサルな指導 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導について : 2件 ・個々に合った進路選択 : 1件 ・就労先での支援について : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・インクルーシブ教育 : 1件 ・通常学級でできる合理的配慮と特別支援学級での対応 : 1件
⑥連携・理解促進（計5件）	⑥検査・診断関連（計3件）	⑥特になし（計1件）
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携 : 2件 ・他の児童生徒への理解促進 : 2件 ・交流授業の在り方 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達知能検査の仕方や結果の読み取り方 : 1件 ・検査結果をいかした指導 : 1件 ・学習障害（特に読字障害）について : 1件 	
⑦計画・評価（計3件）	⑦ICT活用（計3件）	
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の支援計画の妥当性 : 1件 ・短期目標・長期目標の考え方 : 1件 ・進路指導 : 1件 	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的なICTの活用 : 1件 ・特別支援でのICT活用 : 1件 ・特別支援教育におけるICT活用 : 1件 	
⑧特になし（計2件）	⑧その他（計3件）	
	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援コーディネーターの業務 : 1件 ・インクルーシブ教育 : 1件 ・配慮を必要としない子へのフォロー : 1件 	

通常学級担当では、個に対する具体的な支援方法・対応に関わる回答と、通常学級の集団の中での接し方について学びたいという回答が多く見られました。特別支援学級担当やコーディネーターでは、個別の支援の方法について、様々なケースごとに学びたいという回答が多く見られました。

12. 日常の（学級）指導の中で、どのような特別な支援を行っていますか。

通常学級担当者	特別支援学級担当者	コーディネーター
①個別支援の充実（計31件）	①個別支援の充実（計20件）	①個別支援の充実（計8件）
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の声かけ・指導 : 15件 ・生徒の特性に応じた支援 : 8件 ・学習課題の調整 : 5件 ・座席配置の工夫 : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の特性に応じた支援 : 8件 ・個別の声かけや指導 : 7件 ・児童のペース・レベルへの配慮 : 5件 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別最適な指導・支援 : 4件 ・児童の実態に応じた対応 : 2件 ・生徒に寄り添った指導 : 2件
②授業のユニバーサルデザイン（UD）化（計23件）	②学習支援の工夫（計15件）	②学習支援の工夫（計7件）
<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的支援・ICT活用 : 12件 ・教室環境の整備・掲示物の工夫 : 7件 ・刺激量の調整 : 2件 ・見通しを持たせる授業構成 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT・デジタル教材の活用 : 4件 ・教材・ワークシートの工夫 : 4件 ・視覚的支援の提供 : 4件 ・テスト時の配慮（読み上げ、ルビ、拡大印刷等） : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT・視覚的教材の活用 : 2件 ・授業のユニバーサル化 : 2件 ・教室環境の工夫 : 2件 ・板書の工夫 : 1件
③情報伝達の工夫（計14件）	③心理面・社会性への支援（計12件）	③学習内容の調整（計5件）
<ul style="list-style-type: none"> ・視覚、聴覚を組み合わせた情報提示 : 5件 ・分かりやすい指示の工夫 : 4件 ・一斉指示後の個別フォロー : 3件 ・予定・手順の可視化 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴・受容的態度 : 5件 ・自己肯定感・自己理解の促進 : 4件 ・S S T（ソーシャルスキルトレーニング） : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題量の調整 : 2件 ・課題の精選 : 2件 ・作業量の調整 : 1件
④心理面でのサポート（計8件）	④専門的支援（計8件）	④特別支援体制の運用（計4件）
<ul style="list-style-type: none"> ・クールダウンの場面づくり : 3件 ・安心できる環境づくり : 3件 ・肯定的な声かけ : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・通級指導での支援 : 3件 ・特別支援学級での指導 : 3件 ・言語・コミュニケーション支援 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援学級での個別指導 : 2件 ・通級指導の活用 : 1件 ・支援員の配置 : 1件
⑤組織的な支援体制：（計7件）	⑤環境調整・組織的支援（計7件）	⑤心理社会的支援（計3件）
<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援員との連携 : 3件 ・保護者との連携 : 2件 ・教員間の情報共有 : 2件 	<ul style="list-style-type: none"> ・教室環境の整備 : 2件 ・支援員の配置 : 2件 ・教員間・保護者との連携 : 3件 	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を育む段階的支援 : 1件 ・コミュニケーション支援 : 1件 ・クールダウンの場面づくり : 1件

⑥その他（計2件）		⑥組織的な支援体制（計2件）
・特に支援なし、担当外：2件		<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターによる連携 ：1件 ・個別の指導計画・支援計画の活用 ：1件

通常学級で行っている支援方法は、授業のUD化、情報伝達の工夫といった児童生徒の環境整備に関わるものが4割を超えました。その他、個別の支援や心理面でのサポート、組織的な支援体制づくりについての回答も見られました。

通常学級担当、特別支援学級担当、コーディネーターの三者とも、一人一人への個別最適な支援の方法や学習支援の工夫についての回答が多く見られました。

13. 日常の学級指導の中で特別な支援を行う上で、困っていることがありましたらお答えください。

<通常学級担当>

①指導・支援方法の課題（計15件）

- ・どのような支援が適切なのか考えるのが難しい
- ・どのように接し指導することが本人のためになるのかわからない部分がある
- ・一人ひとりの児童にあった対応が、あまりできていない
- ・こだわりが強く話が入っていかない生徒の対応
- ・タブレットを遊びに使ってしまう生徒への対応
- ・学力の低い児童へのアプローチ
- ・支援の仕方、他の生徒たちへの周知
- ・支援を要する児童への対応
- ・児童との関わり方
- ・反応が返ってこない子への指導
- ・通常学級の中で、いかに個別の困り感を支援するか
- ・特性の把握が難しい
- ・多動の対応
- ・一度崩れた時になかなか戻れない（話を聞いたり、指示を受け入れたりできず騒ぎまわってしまう）
- ・痼疾等がおきたときの個別の対応と学級全体の対応など

②人員・時間不足の問題（計11件）

- ・圧倒的に人手が足りません。配慮すべき児童・内容に対し、大人の手が見合っていない
- ・人手が足りない：3件
- ・細やかな対応をするには人手不足であること
- ・個別に支援が必要な児童が複数名いて手が足りない
- ・時間が足りない
- ・支援が必要な生徒に十分な配慮を行えていない（時間や人力的な理由で）
- ・特別支援にかかる時間が足りない
- ・支援の先生がいない状況の中で、適切な指導ができるかが不安
- ・生徒数が多い中、支援学級の生徒にまで手が回らない時が多々ある

③他児童・周囲との関係（計8件）

- ・個に応じて対応が違うことを「ひいき」と捉える児童や保護者がいないか悩む
- ・周りの子ども達に、特別な子だと思われないような指導法
- ・周囲の児童の理解（対象児童のことを理解してもらうために、どう説明したらいいか）
- ・他の児童に対してどのように説明するか
- ・全体への指導と個への対応の両立
- ・周りとの平等性
- ・他児童とのバランス
- ・全体指示が通りにくい児童が「わからない」とすぐに声を出し、クラス全体が集中する雰囲気になれない

④保護者との関係（計3件）

- ・ 苦手としていることの保護者との共通理解とその対応策について
- ・ 特別な支援が必要な児童について、その児童の保護者に理解してもらうこと、連携をとるのが難しい
- ・ 特別支援対象だが、親が受け入れてくれない場合の対応等

⑤連携・情報共有の課題（計3人）

- ・ 教科担任制の場合、一貫した対応を行うにはどうしたらいいか
- ・ 周囲の先生との連携・情報共有
- ・ 支援学級から交流している児童に支援する方法を特別支援学級の担任と共有する方法に悩んでいる

⑥その他の具体的な課題（計8件）

- ・ グレーゾーンの子どもたちが増え、その中でも支援の度合いが強い児童がいる場合、支援学級にも入れず、通常でも辛い児童がいる。その場合の居場所づくり
- ・ 高学年になってからでは手遅れの場合が多く、低学年のうちから適切なアプローチが必要
- ・ 合理的配慮をどこまで求められるのか
- ・ 複式学級ゆえの異学年の指導
- ・ 支援の境界について
- ・ 交流学級の風土
- ・ 児童の資質・能力の向上について
- ・ 生徒の特質を早めに知ることが出来るといい

⑦特に課題なし（計7件）

<特別支援学級担当>

①指導・支援方法の課題（計15件）

- ・ 場面に応じた具体的な支援のあり方
- ・ わがままと特性の区別の付け方
- ・ 一人一人の学力や個性の違いに対応した学習指導の仕方
- ・ 自分の意思が強く、頑固な子供への対応。どうやって教員のやらせたいことをさせるのか
- ・ 暴れる生徒の対応
- ・ 暴力や暴言に対する対応
- ・ 子供が急に気分を損ねて暴れたとき
- ・ 無視をしてくる生徒への対応方法
- ・ 生徒の気持ちの整理がつかないときの対応および距離感の取り方
- ・ 指導が入りづらいことがある
- ・ 児童の実態に応じた指導
- ・ 児童の集中力の低下
- ・ 児童の状態の見とり
- ・ 集中が持続しないこと
- ・ 障害や特性に応じた対応 など

②人員・時間不足の問題（計7件）

- ・ 教員の人数に対して子供の人数が多い
- ・ 教師の人数が不足していて、折角支援学級にいるのに、きめ細やかな教育ができないこと
- ・ 常に教員の数が足りないこと
- ・ 人材不足
- ・ 人手不足
- ・ 一対一の対応が必要な子が増えている
- ・ 対応すればするほど業務過多となる現状

③学習指導・進路の課題（計5件）

- ・なかなか学んだことが積み重ならない
- ・予定通りに進まないことがある
- ・異学年が多すぎて、おおざっぱにしか学習指導できない。個に応じた指導が丁寧にとはいかないこと
- ・学習の支援が不足してしまったり、子ども達の体調次第でやる気に影響が出てしまったりして、学習にならないことがある
- ・普通高校受験の学力の獲得を求められること

④保護者との関係（計4件）

- ・個に合った適切な指導方法や保護者対応
- ・保護者との連携、保護者との共通理解の仕方及びアドバイスの仕方
- ・保護者との連携の仕方について ・保護者対応

⑤教材・指導環境の課題（計4件）

- ・教材、教具が一層充実されると助かる
- ・教室や学校環境づくり、特別支援に基づいた声掛けや仕掛け等の有効性を共有しにくい
- ・経験が浅いので日々手探りで授業している状態です。特別支援で使える教材や授業方法などあったら教えてほしいです
- ・精神的に不安定になって生徒への寄り添い方、生徒に合わせた教材選定

⑥交流・通級指導の課題（計4件）

- ・学級での授業時間に、教室を抜けて通級指導を受ける形をとっているが、限界にきていると思われる
- ・交流学級での対応 ・通級について、まだまだ理解が進んでいないこと
- ・特別支援学級の情緒クラスの担任をしていますが、交流授業に行く生徒が多く縦割りなので全学年のことを掌握しなければならないこと

⑦その他の課題（計3件）

- ・学校では落ち着いているが、家や地域で問題行動を起こしている
- ・子ども自身が自分の特性や実態を理解していないこと ・担任間の温度差

⑧特に課題なし（計2件）

- ・とくになし：2件

<コーディネーター>

①保護者との関係・連携（計6件）

- ・家庭との共通理解、連携 ・家庭との適切なかかわり方
- ・通常学級に在籍する特別な配慮が必要な児童への支援の仕方について、学校でできることに限界があり、保護者理解が得られない
- ・特別な支援が必要な児童で、保護者の同意が得られないケース
- ・不登校傾向になっている児童への対応。保護者の気持ちの掃き出しの場の提供の仕方
- ・保護者の要望に歩み寄りながら進めているが、教育としての実感が出てきにくいこと

②人員・時間・業務の課題（計4件）

- ・交流学习や支援の必要な児童に対して人員が足りないため、必要な支援ができない
- ・人手のなさ 専門性のなさ ・特別な支援を行うための準備時間の確保
- ・研修や報告が多く、多忙である。休みたくても休むことができない過密な状況です。コーディネーターに関わることも多くどれだけ働いていても指摘されることが多く報われない役職だと思います

③個別支援の方法（計4件）

- ・それぞれの児童に合った支援をそのつどする必要があり、悩むときがある
- ・個々に合う支援にたどり着くこと ・指導と支援の線引き
- ・読み・書きに苦手意識がある子供への支援

④指導上の具体的課題（計2件）

- ・教員に頼りすぎになる事がある
- ・行動上の課題が大きく制止が必要な異性の児童の扱いについて

⑤教職員間の課題（計1件）

- ・支援学級の指導者の指導に困っている

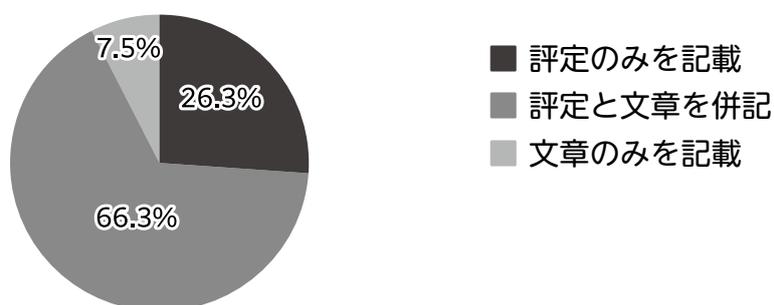
⑥特に課題なし（計1件）

全体的な傾向として、児童生徒の特性理解、人員不足、保護者との連携の3点において困っているという回答が多く見られました。

担当別の傾向では、通常学級担当はどのように児童生徒に対応すべきか、という内容が約27%に上り、指導に困っている様子がうかがえます。また、人員不足のため、十分に対応できていないことへも困り感をもっているようです。その他、特別な対応をとると、他の生徒との差が生まれてしまうことへの懸念も見られました。特別支援学級担当でも同様の傾向が見られ、それぞれの児童生徒への指導方法をどうするかという点と、人員不足への困り感が見られました。一方、コーディネーターでは、家庭・保護者との連携の点で困っているという回答が最も多く見られました。

C 【特別支援学級担当者 および 特別支援教育コーディネーター対象の質問】

1. 情緒学級での評価はどのように表記していますか。



2. 知的学級での評価はどのように表記していますか。



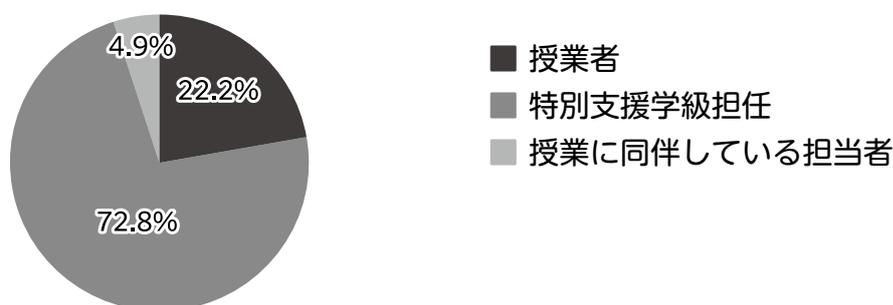
情緒学級では、評価のみの記載が26.3%、評価と文章の併記が66.3%、文章のみ記載が7.5%と、併記が最も多いものの、子供の実態に合わせた記載方法をとっています。

知的学級では文章のみの記載が93.7%と、ほとんどが文章のみを記載していることがわかります。評価と併記しているのは6.3%でした。

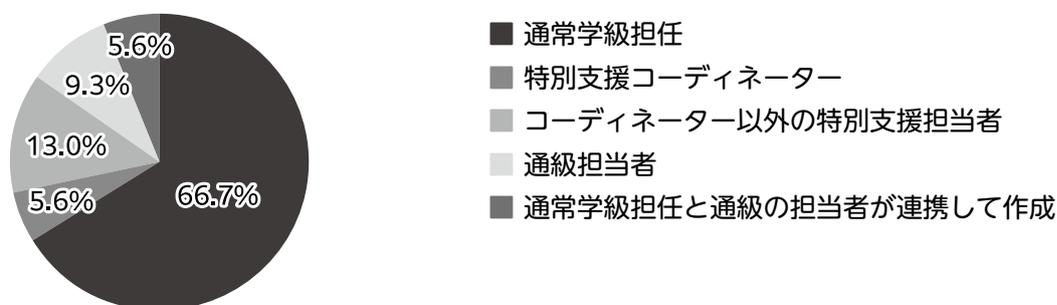
3. 情緒学級の交流授業での評価は誰が作成していますか。



4. 知的学級の交流授業での評価は誰が作成していますか。



5. 通級の児童生徒の個別の教育支援計画は誰が作成していますか。



交流授業の評価は、情緒学級では授業者が行う割合が39.0%と知的学級の22.2%より高くなりました。

通級の児童生徒の個別の教育支援計画の作成者は、通常学級担任が最も多い66.7%、続いて通級担当者が9.3%となりましたが、コーディネーターやその他の特別支援学級担当者などが作成する割合も5.6%、13.0%と、様々なケースが見られました。

6. 自立活動の授業では、どのような活動をしていますか。学級の種別とともに記入してください。

【情緒学級】

①体力・運動関連

- ・体力づくり
- ・ラジオ体操
- ・ボール運動
- ・バランス、ボディーイメージを身に付ける運動
- ・持久力・柔軟性
- ・なわとび
- ・体ほぐし運動
- ・サーキットトレーニング
- ・校歌を歌う
- ・バドミントン

②社会性・コミュニケーション関連

- ・ソーシャルスキルトレーニング (SST)
- ・言葉カードを用いた気持ちの良い言葉の使い方
- ・コミュニケーション、心の安定に関する活動
- ・カードゲーム
- ・誕生会
- ・コミュニケーション、自己理解
- ・クリスマス会

③生活習慣・実践的活動

- ・身の回りのことや社会生活について、一人で生活できるよう様々な事例を想定した活動
- ・お店屋さんごっこ
- ・調理実習
- ・畑活動
- ・先の見通しを持たせる計画表づくり

④認知・学習関連

- ・ビジョントレーニング
- ・微細トレーニング (手先を使う作業学習)
- ・リトミック

⑤制作活動など

- ・カレンダー作成
- ・アイロンビーズ、折り紙などの創作活動

【知的学級】

①体力・運動関連

- ・体力づくり
- ・ボッチャ
- ・走る、なわとび、ボール運動など (粗大運動)
- ・体ほぐし運動
- ・5分間走
- ・ラジオ体操
- ・卓球
- ・体幹トレーニング

②社会性・コミュニケーション関連

- ・ソーシャルスキルトレーニング (SST)
- ・発話練習
- ・コミュニケーションの取り方
- ・誕生会

③生活習慣・実践的活動

- ・基本的な生活習慣を身につける
- ・調理
- ・落ち着いた生活のための一日の流れの確認
- ・交流学級での学習の補完
- ・日常生活の指導
- ・栽培、畑活動
- ・お店屋さん
- ・身の回りの整理整頓など
- ・1日の振り返り

④認知・学習関連

- ・ビジョントレーニング
- ・紙工作等
- ・微細トレーニング
- ・ワーキングメモリを高めること
- ・リトミック

⑤制作活動など

- ・制作
- ・月ごとにカレンダー作成
- ・自然学習

【肢体不自由学級】

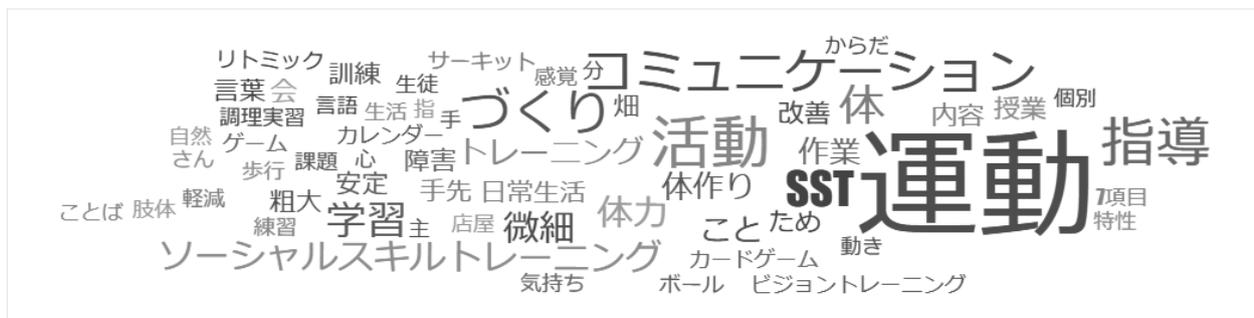
- ・肢体 自力歩行に向けた歩行訓練や補助具の訓練
- ・ストレッチや軽い運動

【病弱学級】

- ・体幹トレーニング
- ・体作り（サーキット、バランスを鍛える活動など）

【通級】

- ・個別指導と小集団指導
- ・運動あそび
- ・会話のやりとり
- ・聞き取りのクイズ
- ・構音指導、吃音、言語発達の遅れの児童を対象に、障害の改善、軽減を目指した指導を行っている
- ・ソーシャルスキルトレーニング（SST）
- ・ことばあそび・ルールのあるゲーム
- ・発音の誤りの改善
- ・リトミック
- ・ことば遊び
- ・リズムジャンプ



※全回答をワードクラウド化したもの

自立活動の授業では、各学級の特性に応じた活動が展開されています。体力づくり、ソーシャルスキルトレーニング、コミュニケーション能力の向上を中心に、ビジョントレーニングや微細運動、調理実習や畑活動など、様々な活動が実施されています。運動面では、サーキットトレーニングやなわとび、ラジオ体操などを、社会性の面ではゲームや誕生会などのイベントを取り入れて活動を進めています。

7. 個別の指導計画はどのように活用されていますか。

<特別支援学級担当者>

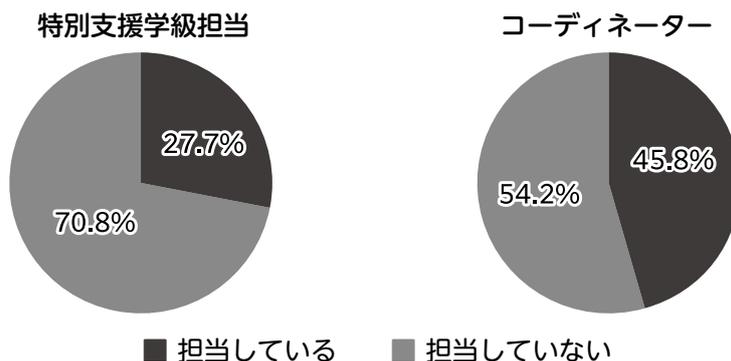
- ①日常的な指導への活用（13件）
 - ・ 日常の学習指導などに活用（7件）
 - ・ 実態把握に活用（2件）
 - ・ 目標の確認や通級指導で活用（4件）
- ②振り返りと評価での活用（計12件）
 - ・ 学期ごとの振り返りに活用（4件）
 - ・ PDCAサイクル関連（2件）
 - ・ 指導の成果と改善（3件）
 - ・ 定期的な見直しに活用（3件）
- ③教職員間の連携・共有（計10件）
 - ・ 共通理解を図るため（4件）
 - ・ 引き継ぎに活用（4件）
 - ・ 支援担当者間で指導方針を共有するために活用（2件）
- ④保護者との連携（計8件）
 - ・ 保護者との共有・説明（5件）
 - ・ 個別面談での活用（3件）
- ⑤記録・文書化（計4件）
- ⑥その他（よくわからない、これから活用したい、困ったときに閲覧）（3件）

<コーディネーター>

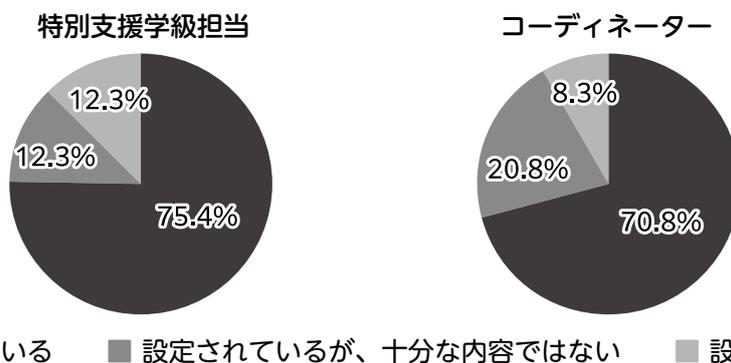
- ①教職員間の連携・共有（計8件）
 - ・ 校内での情報共有（4件）
 - ・ 児童の引き継ぎに活用（2件）
 - ・ 支援委員会で共有（2件）
- ②指導・実践での活用（計6件）
 - ・ 日常指導（3件）
 - ・ 授業改善（2件）
 - ・ その他（1件）
- ③評価・見直し（計4件）
- ④保護者との連携（計4件）
- ⑤実態把握・記録（計4件）
- ⑥通知表作成やパートナーティーチャーとの相談に活用（計2件）

個別の指導計画の活用状況については、特別支援学級担当では日常的な活用および振り返りや評価での活用が多く見られました。特別支援学級担当者、コーディネーターともに教職員間の連携・共有の際に活用するという回答が多く見られました。その他、保護者との連携の際にも活用されていることがわかります。

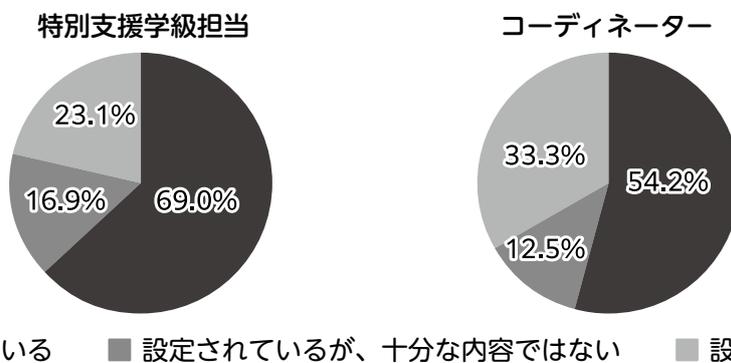
8. 現在、通常学級の授業を担当していますか。



9. 市教研などで、定期的に教員同士が児童生徒について交流する場面は設定されていますか。



10. 合同学習などで定期的に他校の児童生徒同士が交流する場面が設定されていますか。



通常学級での授業については、特別支援学級担当者は27.7%、コーディネーターは45.8%が担当していると回答しており、通常学級でも授業を担当している現状が見られました。市教研などでの交流については、両者とも7割程度が設定されていると回答しています。合同学習などの交流については半数以上が交流する場面が設定されていると回答しています。

11. 特別支援学級に関わる措置変更はどのような流れで行っていますか。

<特別支援学級担当、コーディネーターの回答を合算>

①校内での検討に関するもの（23件）

- ・校内支援委員会で決定している
- ・コーディネーターを中心に支援委員会を設け、対応、対策、支援について検討する
- ・校内支援委員会でよく話し合い、保護者の同意を得る
- ・管理職とコーディネーターを中心に進めている
- ・管理職を中心に特別支援委員会で検討している
- ・特別支援教育コーディネーターや担任、養護教諭、管理職等を交えたケース会議の後、全校職員の参加する校内支援委員会で措置変更について検討

②手続きの進め方について（23件）

- ・学年部会→校内支援委員会→SSW生徒実態把握→本人、保護者と面談→学年部会→校内支援委員会→町の実務者会議
- ・担任による保護者面談を経て、校内支援委員会を開き、その子にとっての措置変更の必要性などを検討し、その結果を保護者に伝え、了承を得たうえで、事務手続きを進めていく
- ・同時進行の場合もあるが、担任の見取り→コーディネーター担任から保護者への話→コーディネーター交え担任保護者→校内支援委員会→市支援委員会
- ・担任→主任→主幹
- ・担任→コーディネーター→校内支援委員会
- ・担任からコーディネーター、管理職を経て教育支援委員会を実施後、市の特別支援教育推進会議部会で最終決定
- ・校内支援委員会→保護者との面談→再度校内支援委員会→町内支援委員会
- ・校内支援委員会→保護者面談→就学指導委員会→市の就学指導委員会
- ・ケース会議を通して児童の実態を共有し、太陽の園の検査を参考にして、保護者と丁寧に話し合い、措置変更するかを決定
- ・保護者面談>校内検討>市教育支援委員会

③行政手続き中心の回答（11件）

- ・市教委通知の通り
- ・町の方針通り
- ・教育委員会を通して、年度初めに行う
- ・定められた流れで行っている
- ・校内教育支援委員会で検討し、町の教育支援委員会に諮る
- ・市教育支援委員会での審議を通して措置変更を行っている

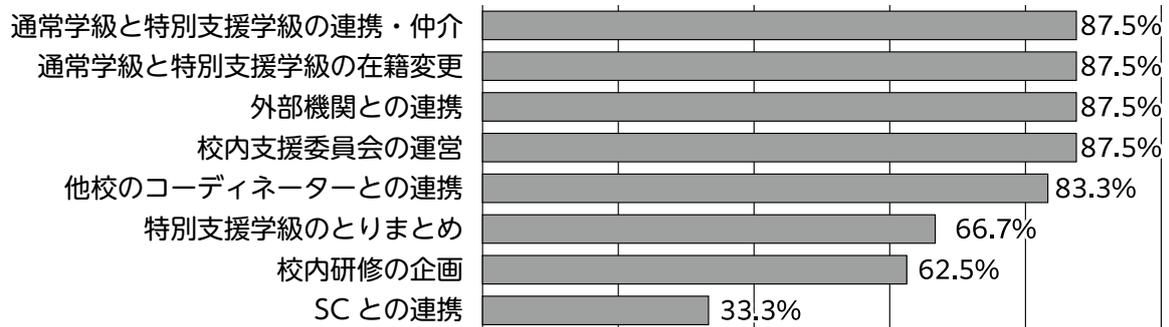
④保護者との協議を重視した回答（12件）

- ・保護者との面談を重ねる
- ・保護者の願い出があつて、特別支援会議で協議
- ・保護者・本人との懇談→校内特別支援委員会→町教育支援委員会
- ・保護者の意向を確認後、校内で会議をしてからその結果を保護者に伝えている
- ・保護者または担任からの相談を受け、校内支援委員会で検討。個別に学ぶ環境が相応しいと判断された場合、校内就学委員会で検討、保護者の同意を得て、市へ希望を提出

措置変更の流れについては、コーディネーターや管理職を中心に校内支援委員会を設置し、決められた手続きに沿って進めているという回答が多く見られました。それぞれの先生方が保護者面談を通して十分に意向を確認した上で、各種機関と連携しながら丁寧に手続きを進める様子が見られました。

D 【特別支援教育コーディネーター対象の質問】

1. コーディネーターとして担当する業務をすべて選んでください。



2. 校内の特別支援学級担当者へどのような支援を行っていますか。

①指導・助言関連

- ・授業参観、カンファレンス、アドバイス
- ・具体的な指導方法や支援策の助言
- ・支援学級の児童について交流、助言
- ・合同授業等の提案など
- ・日常から指導の交流をしている
- ・児童理解、指導支援の仕方

②情報共有・連携関連

- ・情報提供や支援体制の調整
- ・連携を密にし、いつでも協力できる体制を整えている
- ・特別支援教育コーディネーターと特別支援学級担当者が同じため、管理職や教務主任と連絡・相談
- ・情報交換など
- ・必要な時に助言、情報の共有化
- ・生徒の情報共有

③計画・文書作成関連

- ・教育課程の編成
- ・特別支援関係資料の確認と作成
- ・個別の支援計画
- ・書類作成方法の支援
- ・指導計画作成のサポート
- ・指導計画の立案

④支援体制・運営関連

- ・交流学习、介護員などの配置シフト作成
- ・支援学級に関する行事のアナウンス

⑤実務・教材関連

- ・検査結果を基にした子に応じた指導
- ・教材教具の準備
- ・資料収集

⑥相談・対応関連

- ・進路相談、保護者対応
- ・進路業務
- ・療育機関・医療機関等の連携

コーディネーターとして担当する業務は、8割以上の方が通常学級と特別支援学級の連携・仲介、在籍変更、外部機関との連携、他校のコーディネーターとの連携、校内支援委員会の運営と回答しています。その他、特別支援学級のとりまとめと校内研修の企画も6割以上の方が担当していると回答していました。

特別支援学級担当者に対しての支援については、児童生徒についての交流や助言を行うことや、情報共有や支援体制の調整などの体制作りを進めている様子が見られました。また、個別の支援計画などの文書作成のサポートなどでも重要な役割を果たしています。

3. 支援が必要な児童生徒が在籍する通常学級担当者への支援をどのように行っていますか。

①授業観察・支援関連

- ・ 授業参観、カンファレンス、アドバイス
- ・ 授業内容を確認し、見通しをもたせる
- ・ 授業の参観や支援の観点からの助言など
- ・ 支援者として授業に同伴
- ・ 交流学級での授業の参加に際しての支援、一部教科の担当
- ・ 授業での支援や実態把握、支援策の助言

②支援員関連

- ・ 支援員の配置
- ・ 支援員の配置計画を立てる
- ・ 介護員と連携し支援する

③連携・情報共有関連

- ・ 担任を中心に方法を整理して、校内で共有
- ・ 学級担任と連携する
- ・ 担任や通級指導担当教諭との連携を密にし、授業の様子を伝えている
- ・ 情報提供や支援体制の調整
- ・ 個別の支援計画の作成のサポート、情報共有の際の資料作り

④児童理解・実態把握関連

- ・ 日常的な見取り、相談等
- ・ 児童理解、保護者との連携、指導支援の仕方
- ・ 対象児童の特性に応じた支援の仕方を提示
- ・ (学級の児童に対して) 児童理解に関する指導

⑤ケース会議・措置変更関連

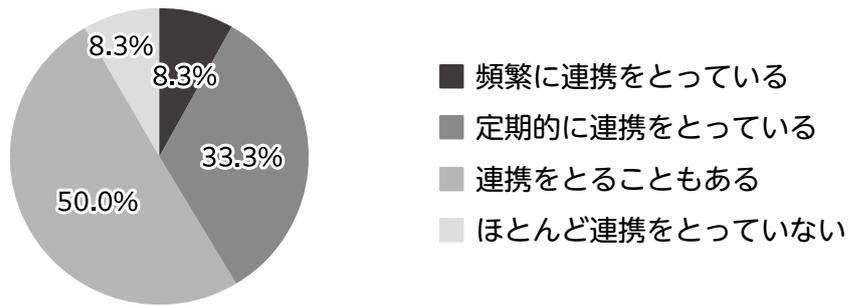
- ・ ケース会議を行う
- ・ 措置変更手続きの支援
- ・ 措置変更を見据えた対応の実施

⑥総合的な支援体制

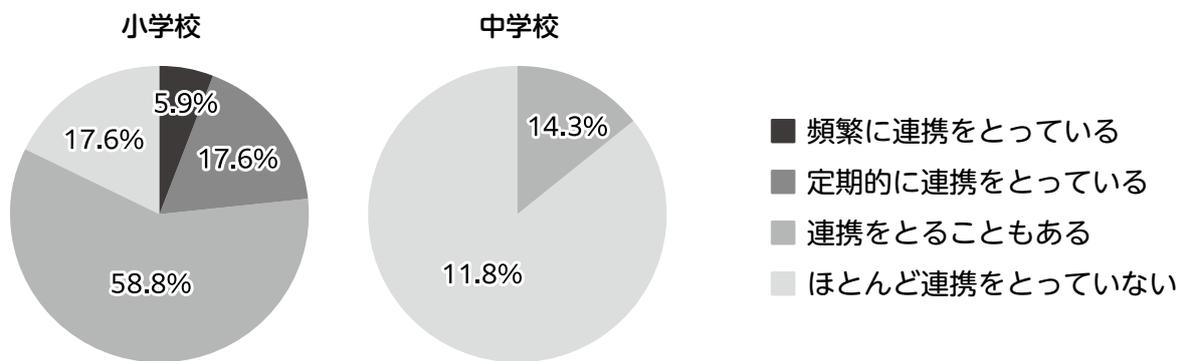
- ・ 担任が中心に行っているが、全体での体育や行事などは、職員全体で実態と支援を共有してから行うようにしている
- ・ 学習支援員配置、合理的配慮アドバイス、学級巡回、不適応対応、相談

通常学級担当者への支援については、特別支学級担当者と同様、授業参観などを行いながら交流や助言を行い、情報交流を行うことなどは共通しています。一方、支援員や介護員の配置などの計画も担当していることがわかります。また、ケース会議、措置変更手続きに関する支援においてもコーディネーターが重要な役割を果たしています。

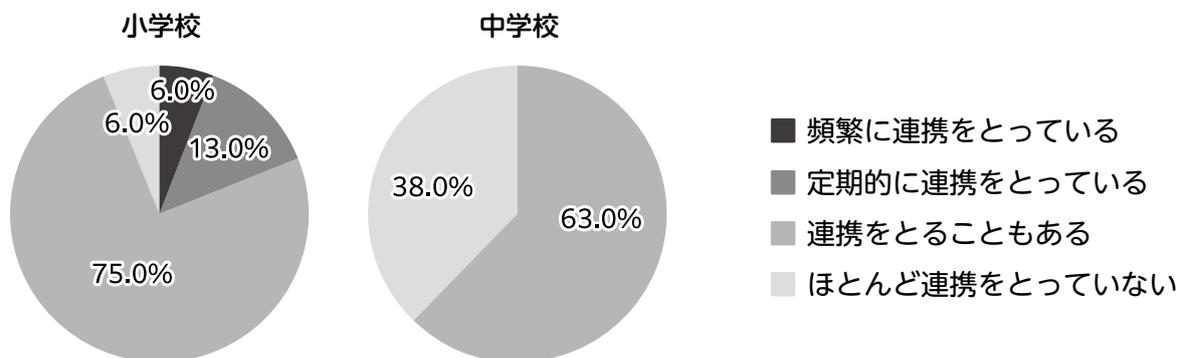
4. 異なる校種の学校間（小一中）でのコーディネーター同士で連携をとっていますか。



5. 同じ校種の学校間（小一小）、（中一中）でのコーディネーター同士で連携をとっていますか。



6. 就労までを見通した進路指導を進めるために他校との連携をとっていますか。



他校との連携については、小一中での連携は、定期的、あるいは頻繁に連携をとっている割合が40%以上なのに対し、同じ校種間では、小一小のほうが中一中よりも連携をとるケースが多く見られました。また、就労までを見通した進路指導を進める目的では、小学校、中学校ともに連携をとる機会は少ないことがわかりました。

7. 就学前検査を活用している場合、どのように活用していますか。

①支援計画作成の参考

- ・ 支援計画と指導計画の作成時に活用
- ・ 個別の指導計画、教育支援計画で共有

②児童生徒の実態把握

- ・ 検査内容に基づく児童の実態把握に活用する
- ・ 児童の実態把握、教育相談資料として活用している。
- ・ 苦手な領域の把握など
- ・ どのような支援が必要かあらかじめ検討しておく
- ・ 検査結果を見て、児童理解を深める
- ・ 学習面や生活面の不安がないかどうか確認し、次年度の教育に活かす
- ・ 学習面・生活面が心配される子の把握

③情報共有のための資料

- ・ 職員会議などで情報を共有する。
- ・ 情報共有
- ・ ファイリング

④学級編成資料

- ・ クラス編成の時活用している。
- ・ 学級編成、就学指導関係
- ・ 適切な学びの場の決定

⑤活用していない（計3件）

8. 就学前の5歳児検診などの情報を活用している場合、どのように活用していますか。

- ・ 特別な支援が必要な児童に関する資料として活用している。
- ・ 発達の遅れ、個別の配慮の有無等を確認、学級編成（特別支援学級入級準備含む）
- ・ 児童の実態把握
- ・ 記録の一つ、支援指導計画
- ・ 異常があった場合には、情報を頭に入れ、その後の学習において配慮する
- ・ 中学校なので小学校が支援計画に反映させていると思います。
- ・ ファイリング
- ・ 活用していない（4件）

就学前検査については、主に小学校で活用されていることが多く、児童生徒の実態把握や支援計画の作成を中心に活用されています。就学前の5歳児検診についても、児童の実態把握のための資料として小学校にて活用されることが多く見受けられます。

9. よく連携をとる外部機関があれば、その機関名を記入してください。

- ・太陽の園
- ・伊達高等養護学校
- ・むかわ町療育（たんぽぽ）
- ・三恵病院
- ・SSW.パートナーティーチャー
- ・穂別きらり（療育）
- ・のぞみ園
- ・こどもつくる
- ・児童発達支援センター、苫小牧支援学校
- ・室蘭児童相談所
- ・子ども発達支援センターエミナ
- ・ことばの教室
- ・とらい
- ・町教育委員会
- ・洞爺湖町教育支援委員会
- ・町社会福祉課
- ・支援センター
- ・学童
- ・登別市総合相談支援センターen

10. コーディネーターとして業務を進める上で重要だと思うことは何ですか。

①連携・情報共有関連

- ・校内や校外との連携
- ・様々な先生方との連携
- ・情報の共有、連絡の徹底
- ・情報交換
- ・報連相
- ・人のつながり、情報・他校間、専門機関、保護者との連携と情報共有

②児童理解・支援関連

- ・生徒の理解を校内に進めること
- ・適切な学びの場の見極め
- ・特別に配慮が必要な児童を把握し、家庭や学級担任との連携を深める
- ・児童の困り感、主訴を明らかにした上で必要な支援をいつ、誰が、どこで行うかをはっきりさせる事
- ・見通しをもった計画的な指導や支援

③保護者対応関連

- ・保護者の理解を得たり啓蒙したりすること
- ・保護者の気持ちに寄り添った対応
- ・学校が考える教育的措置と保護者の願い、思い、不安とのギャップを埋めること

④傾聴・寄り添い関連

- ・話を聴くこと
- ・支援員をはじめ、話をよく聞くこと
- ・困り感をもつ児童と保護者に寄り添うこと
- ・気配り

⑤その他

- ・情報共有、担任の先生の困っている事を吸い上げて支援の体制の原案を構築する事、各種書類の整備
- ・中学校へつなぐこと
- ・経験

コーディネーターの業務を進める上で重要だと思うことについては、様々な相手との連携や情報共有との意見が多く上がり、教職員、専門機関、保護者との密接な関係構築が不可欠だという様子が見られました。また、児童の特性や困り感を正確に理解し、適切な支援方法を見極めることが求められ、児童生徒の支援のための体制作りを丁寧に進める様子が見られました。

11. コーディネーターとして業務を進める上でどのような環境を整えてほしいと思いますか。

①業務体制に関する要望

- ・できれば担任を持っていないときに、コーディネーターの仕事をしたい
- ・担任との兼務は厳しい。コーディネーター業が十分に発揮できない
- ・担任との兼務はせず、コーディネーター業務を独立できるとよい
- ・フリーの立場であること（担任業務がないこと）
- ・コーディネーター業務が分掌に位置づいていないため業務過多になる

②時間・業務量に関する課題

- ・コーディネーターの仕事が多いので軽減してほしい
- ・空き時間があると、仕事ができる
- ・コーディネーター業務を進めるための時間の確保
- ・時間的余裕
- ・通常学級における特別な支援が必要な児童を見とるための時間が確保できること

③書類・事務作業の効率化

- ・教育支援計画と指導計画、就学措置に関わる報告書など作成する資料が多いのに、同じ内容を直接入力しなければならない
- ・書類の作成に関するスリム化
- ・個別の支援計画や指導計画をある程度共通化し、進学しても大きく作り直すことの無いようにしてほしい

④連携・研修に関する要望

- ・町内で学校間に差があるように感じるので、共に研修する場や困っていることを話し合える場があるといいと思う
- ・コーディネーター業務の研修の機会を設けてほしい
- ・幼保、小、中のスムーズな連携
- ・知識のある別のコーディネーターの指名

⑤人員・設備面の充実

- ・支援員・介護員の適切な配置
- ・児童の実態や障害の重さに応じて支援者を増やすなど柔軟な対応
- ・人員の確保と教室などの設備面

⑥その他

- ・外部機関と連携する際の手続きの簡略化
- ・現段階では思いつきません

コーディネーターの環境整備において、多く挙げられた課題は「業務の負担と時間確保」であることが浮き彫りになりました。担任との兼務による負担が大きく、コーディネーター業務に専念できる環境が強く求められています。また、書類作成が効率的に行える環境づくり、研修機会の拡充、支援員の適切な配置など、業務の質的改善の必要性が示されました。

調査を通して見えてきたこと・現状と課題

【通常学級担当と特別支援学級担当の比較から】

今回の調査から、通常学級担当教員の特別支援学級担当経験年数が平均1.7年であるのに対し、特別支援学級担当教員は平均7年の指導経験を有し、同じ学級種別を継続して担当する傾向が見られました。また、コーディネーターは、特別支援教育の経験が豊富な教員だけでなく、経験年数の比較的短い教員が担当する事例も散見されました。

支援方法に関する研修ニーズについては、通常学級担当は授業のユニバーサルデザイン化や情報伝達の工夫など、学習環境の整備に関するものが中心となっています。一方、特別支援学級担当者とコーディネーターは、個々の特性に応じた支援方法に焦点を当てた、より専門的な知識を求めています。これらの専門的な知識や経験を学校全体で共有し、活用できるよう校内支援委員会等を通じた協働的な指導体制の構築が求められています。

【研修体制について】

約7割の方が特別支援教育に関する研修を実施していると回答しており、半数以上が外部講師を招いての講演や研修を行っています。しかし、小学校で22.9%、中学校で43.4%が「数年に1回程度」あるいは「未実施」と回答しており、特に中学校における研修実施率の低さが課題となっています。実施されている研修内容は、特別支援教育の基礎理論から児童生徒の実態把握まで多岐にわたっています。

【連携体制の現状と課題】

校内外の連携については、各校ともコーディネーターを中心とした体制が構築されており、必要に応じて相談や情報共有が行われています。通常学級担当教員の主な相談相手は、コーディネーターが約7割、特別支援学級担当教員が約1割となっており、コーディネーターが連携の要となっていることは明らかです。具体的な連携方法としては、定期的な交流会（約50%）、随時連携（約20%）、支援委員会を通じた連携が主となっています。また、共有ドライブの活用など、ICTを活用した連携事例も見られました。外部機関との連携においても、コーディネーターが中心的な役割を担っています。

一方で、コーディネーターへの業務負担の集中が課題として浮かび上がっています。特に学級担任とコーディネーターを兼務する場合、業務時間の確保が困難となっており、限られた教職員数の中で効率的な業務遂行体制の確立が急務となっています。

【課題のまとめ】

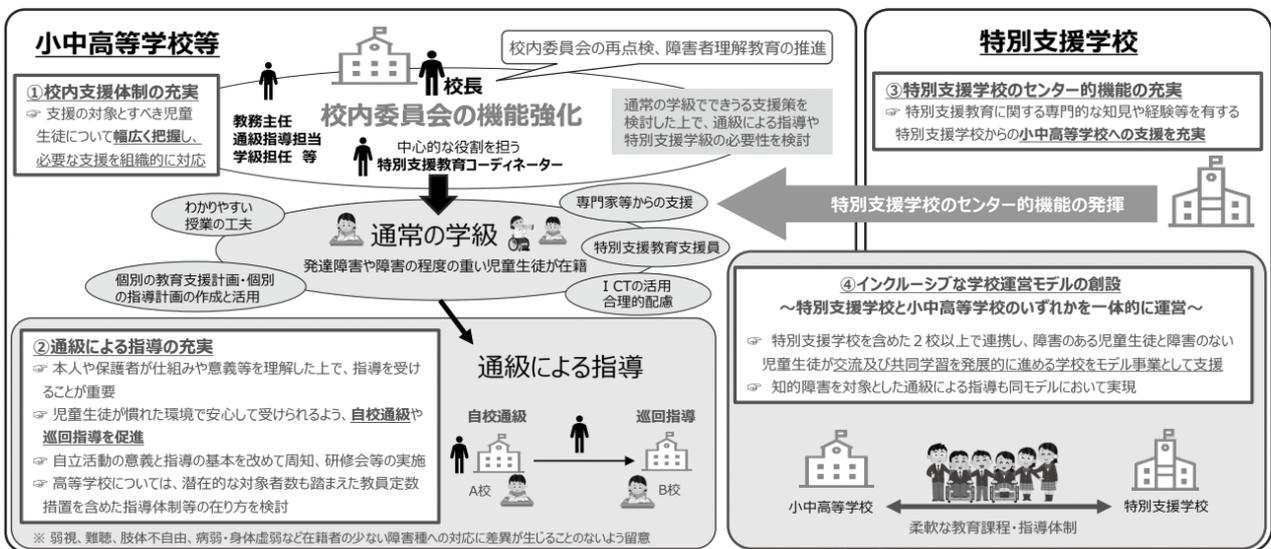
以上の考察から、連携推進における主要な課題として、次の2点が挙げられます。

- ・研修等を通じた教員一人一人の専門性の向上
- ・特定の教職員へ負担が集中しないような組織的支援体制の確立

特別支援教育に関わる各種連携を効果的に進めるために

調査を通して、研修等を通じた教員一人一人の専門性の向上と組織的支援体制の確立が課題であることが明らかになりました。では、この課題にはどのように取り組めばよいのでしょうか。

まず、教員一人一人の専門性の向上に向けて、各学校の実態に応じて計画的に研修を行うことが重要です。各校で選ばれている具体的な研修内容としては、特別支援教育の基礎知識、児童生徒の理解、個別の教育支援計画作成、合理的配慮、ユニバーサルデザイン等が挙げられます。研修を行う上では、特別支援学校や医療機関、発達支援センター等の外部機関と連携し、臨床心理士等の専門家による講義、ワークショップ、事例研究会、擬似体験プログラム等、研修の目的に応じて講師を依頼することで、より専門性の高い研修を実施することが効果的です。



文部科学省「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告」より

組織的支援体制の例として、文部科学省が示した「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援体制」について紹介します。この支援体制では、校内委員会が中心となって、様々な関係者との連携を図りながら支援を展開します。

校内委員会は、支援を必要とする児童生徒を幅広く把握し、組織的な対応を行います。支援の段階としては、まず通常の学級でできる支援策として、わかりやすい授業の工夫や、個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と活用等を検討します。その上で必要に応じて、通級による指導の実施や特別支援学級への移行を検討します。さらに、特別支援学校と連携し、専門家からの支援を受けることも検討します。

校内委員会におけるコーディネーターの役割は多岐にわたります。具体的には、校内外の関係機関との連携・調整、個別の教育支援計画作成の支援、教職員への研修・相談対応、特別支援に関する情報収集・提供、委員会全体の運営・管理などが挙げられます。これらを効果的に推進するためには、他の教職員との役割分担を明確化し、コーディネーターが本来の機能である「連携・調整」に注力できる組織体制を構築することが重要です。

参考文献

- ・文部科学省ホームページ「特別支援教育について」
- ・文部科学省「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
- ・文部科学省「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議報告」
- ・国立特別支援教育総合研究所「『インクルCOMPASS』ガイド」
- ・栃木県総合教育センター「特別支援教育の充実に向けて」～特別支援教育コーディネーターとの連携を通して～
- ・埼玉県立総合教育センター「特別支援教育コーディネーターの連携と協働に関する調査研究」
- ・佐賀県教育センター「特別支援教育コーディネーターのための『つなぐ』『支える』『つなげる』役割ガイド」

令和6年度 所員一覧

役職名	氏 名	所属学校	職 名
所 長	佐 藤 淳	伊達市立東小学校	校 長
副 所 長	横 山 康 彦	登別市立鷺別中学校	校 長
事務局 長	高 橋 賢 治	登別市立鷺別小学校	主幹教諭
事務局次長	黒 川 知 恵	白老町立白老小学校	主幹教諭
所 員	白 井 賢 司	伊達市立伊達中学校	主幹教諭
所 員	渡 辺 隆 之	伊達市立伊達小学校	主幹教諭
所 員	永 井 久	登別市立緑陽中学校	主幹教諭
所 員	藤 田 佳 嗣	伊達市立光陵中学校	教 諭
所 員	甲 谷 健	伊達市立東小学校	教 諭
所 員	中 村 章 人	登別市立登別小学校	教 諭
事務職員	水 留 恵美子	胆振教育研究所	

■ あとがき

昨年末から年始にかけて、年賀状じまいの話題をよく目にしました。昨年10月の郵便料金値上げを機に、年賀状を最後とする人が増えたそうです。その際には「今後はSNSなどで変わらず交流を続けたい」という文面もよく用いられました。ハガキという通信手段が時代の変化に合わせてSNSに移行する象徴的な現象だったように思います。

次期学習指導要領の策定に向けて、中央教育審議会への諮問が行われました。その諮問では、デジタル学習基盤（1人1台端末やクラウド環境等）の活用を前提とした学びや、生成AIが発展する時代における学びの在り方が取り上げられ、教育のICT活用はますます加速していくものと予想されます。私の勤務先でもGoogleチャットやAIを活用した自動採点ソフトを導入することで働き方が大きく変化するなど、学校を取り巻く環境も時代とともに変化していることを実感しています。今回の調査へお寄せいただいた回答の中に、クラウドを活用して情報共有をしているという回答がありました。特別支援教育でのデジタル学習基盤の活用も、今後大きく進むのではないのでしょうか。

ふと、初任の頃に耳にした「不易と流行」という言葉が頭に浮かびました。教育環境が大きく変化する中、「不易」となるべきは何だろうかと考えました。デジタル学習基盤の活用を前提とした特別支援教育という「流行」の中で、私たちは子供たちの成長を見通し、温かく、強い気持ちで個に寄り添い、個に応じた指導や個別最適な学びを行うことが「不易」となるのではないかと考えました。この「不易と流行」を共に生かしながら、各組織、担当者が効果的な連携を進めていただくことを願っております。

今回の調査では、通常学級担当、特別支援学級担当、特別支援教育コーディネーターの3つの担当ごとに異なる質問にご回答いただきました。自由記述の設問が複数あったことから、回答者の皆様には多くの時間と労力を費やしていただいたものと推察しております。その貴重なご意見を、少しでも紙面に活かしたいという思いをもって編集いたしました。日常の実践で気になったことや、他校の取組を知りたい際に、本調査の各項目をご覧いただければ幸いです。

最後に、本冊子の作成にあたり、貴重な時間を割いてアンケートにご回答いただいた皆様をはじめ、ご協力いただいた全ての方々に、心より感謝申し上げます。

胆振教育研究所 所員 永井 久

令和6年度 研究紀要 第243号

調査課題研究

**特別支援教育に関わる
各種連携について**

発行年月日 令和7年3月6日
発行 胆振教育研究所
代表者 所長 佐藤 淳
印刷 (株) 日光印刷